## 御嶽山直下の地震波減衰構造

## Attenuation Structure beneath the Ontake Volcano

- # 山崎 文人[1]; 山田 守[1]; 藤井 巖[2]; 田所 敬一[3]; 伊藤 武男[4]; 政所 茜[5]; 根岸 弘明[6]; 高井 香 里[6]
- # Fumihito Yamazaki[1]; Mamoru Yamada[1]; Iwao Fujii[2]; Keiichi Tadokoro[3]; Takeo Ito[4]; Akane Mandokoro[5]; Hiroaki Negishi[6]; Kaori Takai[6]
- [1] 名大・環境・地震火山センター; [2] 名大地震火山センター; [3] 名大・地震火山セ; [4] 名大・環境・地震火山・防災研究セ; [5] 名大院・環境学・地球環境科学; [6] 防災科研
- [1] Res. Ctr. Seismol. & Volcanol., Nagoya Univ.; [2] RCSVDM, Nagoya Univ.; [3] RCSVDM, Nagoya Univ.; [4] RSVD, Nagoya Univ.; [5] Earth Sc.Environment.Nagoya Univ; [6] NIED

2004 年御嶽山集中観測の一環として、御嶽山山体を囲む形で臨時地震観測を実施したので報告する。。 御嶽山および周辺域での地震活動

御嶽山山麓では長期にわたり特異的な群発地震活動が今日も継続している。この活動を、活動域内で発生した 1984 年長野県西部地震、1 9 7 9 年 10 月およびその後の噴火活動とあわせ、この地域で進行している一連の現象として捉え、そのメカニズムを解明する課題が残されている。これらの活動には地下における流体の挙動が鍵となると推測されるが、その解明にあたっては地殻構造の不均質性の把握が重要となる。2004 年の集中観測にあたっては、反射面の存在を別として解明がすすんでいない御嶽山山体直下の地殻の不均質構造の解明を主な目的として地震観測を実施した。

## 臨時地震観測のねらい

御嶽山周辺には観測点密度が比較的高い名大のテレメーター観測点に加え、山頂点を含む長野県・岐阜県の防災用テレメーター観測網、防災科技研による群発地震域直上の稠密観測網が展開されている。今回の観測では6月下旬から12月中旬までの間、山体を取り囲む形で11点の臨時観測点を展開し、前2者の観測網とともに連続観測を実施した。臨時地震観測システムには白山工業のLS8000(1Hz地震計)近畿計測のEAT8000(2Hz地震計)を用いて、ほぼ10日から2週間に一回、データ収録メディアとバッテリーの交換を実施した。この臨時観測網によって山体直下浅部における地震活動を精度良く決定するとともに、御嶽山直下を通過する地震波を用いて減衰域の検出とその構造の解明を狙った。用いた自然地震のうち御嶽山群発地震震源域内の地震に関しては、防災科技研の稠密観測網によって震源精度を確保した。

## 山体直下における地震波減衰構造

観測データの解析の結果、御嶽山山体直下には地震波の減衰域が存在することが示されたと同時に、この減衰域の規模は大きなものではないという特徴も明らかになった。御嶽山山体の直下には大きなマグマ溜まりのような規模の大きい地震波減衰構造は存在していないと考えられる。